

中部の

# エネルギーを 築いた

# 人々

旧岡谷市庁舎を寄贈した 尾澤福太郎  
—製糸業の電化にも尽力

長野県諏訪湖のほとりに位置する岡谷市は、明治時代よりわが国の生糸の一大生産地として発展し、外国から“SILK OKAYA”、国内からは「絲都岡谷」と呼ばれてきた。1859(安政6)年の横浜港開港以来、1934(昭和9)年までの75年間、生糸はわが国の輸出総額の第一位を占めてきた。こうした時代背景の中、岡谷の果たした役割は大きく、最盛期の1924(大正13)年には生糸全国生産量の約11%を占めていた。

岡谷には地元の地主で製糸業発展の基を築いた三大製糸家、片倉兼太郎、林倉太郎、尾澤金左衛門が1879(明治12)年に開明社を創業し、1年交代の輪番で社長を勤めた。この開明社は同業者を束ねて品質管理、製品の改善に取り組み、その生糸は「信州上一番格」の銘柄で横浜から輸出された。また、開明社の隆盛に伴いもともと地元の地主であった片倉家、林家、尾澤家は発展を遂げ、製糸業界の実力者となり、その後、他の製糸家もこのような結社を組織した。

製糸工場では明治の初め、座繰り製糸から諏訪式繰糸機による器械製糸へと転換し、小杵や揚杵を回す動力は天竜川にかけた水車の回転力を専ら利用していた。その後、動力源は水車から火力による蒸気機関、電力へと変わっていく。

諏訪地方の電気事業は、1897(明治30)年に諏訪電気㈱が設立された。工場用照明、揚水用動力から製糸用動力など多面的に利用され、これらの需要増加に対して電源開発を進めていった。このような情勢の中、諏訪電気㈱は製糸業者による経営が続き、第三代目の社長に尾澤福太郎(1913(大正2)年～1930(昭和5)年)、第四代目社長に三代片倉兼太郎(1930(昭和5)年～1937(昭和12)年)が就任した。

今月号は、尾澤組を結成し大規模な製糸事業を展開した尾澤福太郎を紹介する。尾澤福太郎は、岡谷市に市政が施行された際に、私財を投じて市庁舎を建設し、それを岡谷市に寄贈し、また製糸業経営の傍ら、諏訪電気㈱を経営するなど、社会貢献に尽力した人物である。



尾澤福太郎翁寿像

〔1860(万延元)年～1937(昭和12)年〕  
資料提供:岡谷蚕糸博物館

## 生い立ち

尾澤福太郎は1860(万延元)年、尾澤金左衛門の長男として長野県諏訪郡岡谷村で生まれた。父の金左衛門は地元で製糸業を営み、開明社を創業した。

1894(明治27)年、福太郎は家督を相続し尾澤家の当主となった。同年、開明社から独

立、尾澤組を結成し経営の改善に努め、埼玉県、熊本県、青森県などにも製糸所を所有し全国的に事業を展開した。また、平野村の製糸工場に工女養成所を設置するとともに尾澤組実科女学校を併設するなど人材育成にも力を尽くした。

その後、1923(大正12)年に尾澤組を株式会社化し初代社長に就任した。さらに片倉製糸紡績と尾澤組が合併し、合併後の常務取締役役に就任した。さらに片倉財閥の興隆により経営基盤は強固なものとなり、韓国や中国にも進出し、1918(大正7)年に韓国大邱府に片倉製糸大邱製糸所を建設し取締役社長を務めた。このほか片倉殖産、片倉生命保険など多くの企業の役職を兼務した。

1936(昭和11)年、地元の長野県諏訪郡平野村の改称および市制施行により岡谷市が発足した。この時、尾澤福太郎は故郷のために私財を投じ、市庁舎を寄贈した。この旧岡谷市庁舎は1987(昭和62)年まで岡谷市役所として利用され、その後、消防庁舎として、現在は岡谷文化振興事業団の事務所として利用されている。建物は鉄筋コンクリート2階建て、延床面積は1,517㎡、瓦葺、タイル張りの当時としてはモダンな建物である。2005(平成17)年には、市町村の庁舎建築としてほぼ昔の姿が残る貴重なものとして、文化庁により登録有形文化財に登録されるとともに、経済産業省の近代化産業遺産にも認定された。

その庁舎の横には、尾澤福太郎の業績を記念し、岡谷市出身の彫刻家武井直也による「尾澤福太郎翁寿像」が1936(昭和11)年に建立

された。

碑文には、「尾澤福太郎翁は万延元年岡谷村に生まる。尾澤家は本地製糸業の先覚なり。翁先考を輔けて明治11年機械製糸業を肇め、明治27年以来尾澤組を主宰して、拮居精励、漸く其規模を拡大し、全国各地に工場を設置し、本邦屈指の大製糸家たるに至れり。大正12年、組織を更め、株式会社尾澤組を創設して社長となり、次いで尾澤組は片倉製糸紡績合併し翁はその常務取締役役に就任し、以て今日に及べり、翁の業績に尽瘁すること実に60年に垂れんとす。その間或は支那繭輸入の端を開き或は米国の綿業を視察して経営に改良を加へ、或は平野村工場内に工女養成所を設け之に私立尾澤組実家女学校を併置したる等、其業の発達向上に貢献したる所真に大なるものあり。翁資性温良恭謙、最も公共の念郭く社会公益の為に尽くしたる所挙げて数ふる可あらず。今回、岡谷市の誕生せんとするや翁は巨資を投じて輪喚たる庁舎を建築寄付せらる。市民の謝意寔に切なり。因って本市は翁の銅像を構内に建て永く其徳を後昆に伝へんとす」と記されている。

なお、尾澤福太郎の簡単な略歴は次のとおりである。

### 尾澤福太郎の略歴

西 暦	和 暦	履 歴 内 容
1860	万延元年	尾澤金左衛門の長男として長野県諏訪郡岡谷村に生まれる
1879	明治12	開明社を創業(尾澤金左衛門、片倉兼太郎、林倉太郎が輪番で社長を勤める)
1894	明治27	尾澤福太郎は尾澤金左衛門より家督を相続、尾澤組創業
1895	明治28	片倉兼太郎、一族で匿名組合片倉組を結成
1897	明治30	諏訪電気機設立、初代社長に辻新次、2代目に小口長蔵が就任
1913	大正 2	尾澤福太郎が諏訪電気3代目社長に就任
1919	大正 8	韓国大邱府に片倉製糸大邱製糸所を建設
1923	大正12	尾澤組を株式会社化し初代社長に就任 片倉製糸紡績と尾澤組が合併し、合併後の片倉製糸紡績の常務取締役に就任
1930	昭和 5	諏訪電気4代目社長に三代片倉兼太郎が就任
1936	昭和11	岡谷市が発足、私財を投じて市庁舎を建設し寄贈した 尾澤福太郎翁寿像を市庁舎横に岡谷市が建立
1937	昭和12	死去

## 諏訪電気(株)の沿革

### (1) 諏訪電気(株)の発足

諏訪電気(株)は地元出身の東京在住者、高木守三郎始め16名を発起人として1897(明治30)年に資本金35,000円で設立され、社長に辻新次が就任、本社を東京に置いた。1900(明治33)年に落合発電所(出力:60kW)を建設、運転を開始した。この発電所は、和田峠付近から流下する砥川と御料林を水源に持つ東俣川との合流地点に建設され、7年に一度の奇祭「御柱まつり」の難所、木落坂のすぐ傍らにある。製糸業の電力需要が増加したため1909(明治42)年に蝶ヶ沢発電所(出力:250kW)、1914(大正3)年に砥川発電所(出力:490kW)を建設していった。

その後、製糸工場の電力転換に因應するため、自社の発電所建設地点を諏訪郡から南安曇郡、小県郡などへ拡大していった。さらに関連会社の買収、合併、受電など多くの対策を講じ電源を確保していった。

1912(明治45)年に辻新次社長が退任、東京に置かれていた本社を地元の諏訪町に移転し地元の会社となった。この本社建物は1992(平成4)年まで中部電力(株)下諏訪営業所として利用されていたが、現在、「時の科学館 儀象堂」に建替えられた。その入り口の傍らに「諏訪電気株式会社本社跡」の記念碑と郷土の歌人、島木赤彦の「電灯に 照らされている紺色の 朝顔の花 暁近づけり」の歌碑がある。

### (2) 諏訪電気(株)時代の発電所

諏訪電気(株)は1937(昭和12)年に大町市に本社があった安曇電気(株)と合併し信州電気(株)を設立、1942(昭和17)年に中部配電(株)、1951(昭和26)年に中部電力(株)へと継承された。

諏訪電気(株)時代に建設され、現在も中部電力(株)に継承され運転されている発電所は13カ所、出力11,710kWに達する。

諏訪電気(株)時代の発電所

発電所名	出力(kW)	運転開始年	河川名
落合発電所	200	1900(明治33)	天竜川水系一東俣川、砥川
蝶ヶ沢発電所	250	1909(明治42)	天竜川水系一東俣川
砥川発電所	490	1914(大正3)	天竜川水系一砥川
唐沢発電所	760	1916(大正5)	信濃川水系一男女倉沢川他
和田発電所	1,700	1918(大正7)	信濃川水系一依田川
烏川第一発電所	1,300	1921(大正10)	信濃川水系一烏川他
烏川第二発電所	1,200	1921(大正10)	信濃川水系一烏川他
水沢発電所	1,100	1922(大正11)	信濃川水系一依田川他
塩沢第一発電所	360	1924(大正13)	信濃川水系一所沢西川他
塩沢第二発電所	410	1925(大正14)	信濃川水系一所沢川
青原発電所	2,000	1926(大正15)	信濃川水系一依田川他
福沢発電所	1,400	1929(昭和4)	天竜川水系一上川
米沢発電所	540	1931(昭和6)	天竜川水系一滝の湯川

### (3) 諏訪電気(株)時代の歴代社長

1897(明治30)年から1937(昭和12)年までの間、4名の社長が務めた。

#### ① 初代社長：辻 新次

—1897(明治30)年～1912(明治45)年

辻新次は1842(天保13)年松本に生まれ、20歳の時江戸に出て藩書調書に入り洋学を修めた。維新後は大学南校の校長などを歴任、1883(明治16)年、大日本教育界会長に就任、1886(明治19)年に文部次官に昇進、1892(明

治25)年に退官した。1896(明治29)年に貴族院議員、1908(明治41)年に男爵が授けられた。辻は郷里信州の資源開発のため、百年の計を慮って諏訪電気㈱、伊那電気軌道㈱の設立に尽くし、両社の社長を勤めた。

## ② 第2代社長：小口長蔵

—1912(明治45)年～1913(大正2)年

小口長蔵は1847(弘化4)年諏訪郡小口村に生まれ、19歳で家督を相続し呉服太物商を始める。その後、村会議員、郡会議員となり地方税制に尽力した。1894(明治27)年に独立して小口銀行を経営する傍ら信州銀行の取締役役に就任した。

## ③ 第3代社長：尾澤福太郎

—1913(大正2)年～1930(昭和5)年  
先に記載のとおり。

## ④ 第4代社長：三代片倉兼太郎

—1930(昭和5)年～1937(昭和12)年

1884(明治17)年に二代片倉兼太郎の長男として諏訪郡川岸村で生まれた。1920(大正9)年に片倉製糸㈱取締役、1930(昭和5)年に諏訪電気㈱取締役社長に就任した。1934(昭和9)年に幼名脩一を改名し三代兼太郎を襲名、片倉コンツエルの代表となり、以降数多くの片倉関係の役員を兼ねた。1937(昭和12)年に諏訪電気と安曇電気が合併して発足した信州電気㈱の取締役社長に選任された。1939(昭和14)年に貴族議員に当選、1941(昭和16)年に松本商工会議所の会頭に推薦された。1947(昭和22)年に亡くなり、コレクションの一部が岡谷蚕糸博物館および考古美術館に寄贈された。また岡谷蚕糸博物館のエントランスエリアに三代片倉兼太郎翁像がある。な



片倉兼太郎翁像  
「1884(明治17)年～  
1947(昭和22)年」

が合併して発足した信州電気㈱の取締役社長に選任された。1939(昭和14)年に貴族議員に当選、1941(昭和16)年に松本商工会議所の会頭に推薦された。1947(昭和22)年に亡くなり、コレクションの一部が岡谷蚕糸博物館および考古美術館に寄贈された。また岡谷蚕糸博物館のエントランスエリアに三代片倉兼太郎翁像がある。な

お、同氏の詳細については「片倉製糸・三代片倉兼太郎と電気事業(本掲載平成23年9月号)」を参照されたい。

## (参考) 岡谷蚕糸博物館の概要

1964(昭和39)年にわが国唯一の蚕糸に関する博物館として岡谷蚕糸博物館が開館された。そして半世紀を経た2014(平成26)年、かつてこの所在地にあった旧農林省蚕糸試験場岡谷製糸試験場の建物を再活用し移転した。

リニューアルされた博物館は「歴史に学び、未来を志向・創造する博物館を目指し、愛称を“シルクファクトおかや”としてオープンした。

博物館内は、

- ①ミュージアムエリア:シルクとの出会い・糸都岡谷への道、機械でたどる糸都岡谷ものがたり、資料でたどる糸都岡谷ものがたりごとに紹介
- ②動態展示エリア:岡谷市で1928(昭和3)年に設立され伝統的生産方式で生糸を生産している唯一の宮坂製糸所を併設し製糸工程を見学
- ③コミュニティ・ワークショップエリア:蚕の育つ様子、繭づくりの観察やまゆ工作、小型機織り機の手織りなどができる体験工房に3区分され展示している。



のこぎり屋根をモチーフにした岡谷蚕糸博物館  
(シルクファクトおかや)

なお、アクセスなどの情報は、蚕糸博物館(住所:〒394-0021 長野県岡谷市郷田1-4-8、電話:0266-23-3489)に問合せして下さい。

(寺澤 安正)